米原歴史街道

米原市の歴史・文化財を歩く⑭

特別シリーズ

京極氏と浅井三姉妹物語 最終回

京極氏の聖地・清滝

丸亀藩二代藩主京極高豊は、丸亀藩初代高和の墓所を造営するにあたって、そのころ、すでに廃寺に近い状態だった京極氏初代氏信の菩提寺・清瀧寺・徳源院を京極家の墓所としました。墓所の整備は、近隣に散在していた初代氏信より一八代高吉までの一八基の宝篋印塔を集めて補修し、墓所の上段としました（昭和七年国史跡）。下段には、京極家の中興である一九代高次の石製の霊屋を中心に歴代丸亀藩主の墓所と多度津藩歴代の墓所、さらに北畠具行の宝篋印塔一六基などが配置されています（平成一四年国史跡）。

近世の大名墓は、国許に造営される場合と、国許と江戸の亡くなった場所で造営されることがほとんどで、丸亀・多度津藩京極家のように先祖の埋葬地である米原に葬るというのは極めてまれな事例です。そのうえ、鎌倉以来の先祖の墓も一堂に集めて一族の墓所とし、先祖の地を聖地化したのは全国で京極家墓所しかありません。

▲ 京極家墓所全景（右が下段）

このように、これまで徳源院の京極家墓所を整備したのは丸亀藩二代藩主高豊だとされてきました。もちろん高豊による墓所の整備は間違いないのですが、それはなぜ徳源院でなければならなかったのでしょうか。京極氏初代氏信の墓所という先祖の本貫地だったからでしょうか。おそらく上段にある氏信の墓石も、この高豊によって整備されたものであり、もともとこの場所にあったものではないと考えられます。高豊による整備は上段の部分だけだったと想定されます。

まず高次が葬られた

それでは、なぜ徳源院を墓所としたのでしょうか。それは下段の墓所の造営が大きく関わっていたと考えられます。下段で最も古いのは京極高次の石製の霊屋です。高次は慶長一四年（一六〇九）に小浜で亡くなっていますが、その墓所は清瀧寺に設けられています。高次の後を継いだ忠高は、出雲・隠岐の太守として松江（島根県）に転封となりますが、そこで忠高は入国した寛永一一年（一六三四）一一月に意宇郡竹矢村の安国寺を「祖先菩提寺」に定めます。ここには、高次の供養塔（宝篋印塔）が建立されています。しかし、寛永一四年（一六三七）に没した忠高も、墓所は清瀧寺に営まれ、安国寺には営まれませんでした。このように、近世大名として清瀧寺を墓所としたのは、丸亀藩二代高豊ではなく、京極家一九代の京極高次でした。そして、高次という京極家中興の祖が、清瀧寺を墓所として定めたことによって、以後の京極家の墓所が清瀧寺に定められたと考えられます。その後、高次・忠高という近世大名京極家の墓所の上段に、中世京極家の墓所が高豊によって整備されたようです。

そして整備・再建された寺院は、初代氏信の法号「清瀧寺殿」より寺号を清瀧寺とし、近世大名として再スタートを切った丸亀藩初代高和の法号「徳源院殿」より徳源院と命名されました。京極家墓所は、高次と忠高が清瀧に葬られたことにより、実は近世大名京極家の墓所が先に成立し、さらに丸亀藩主によって中世京極家の墓所が整備され、現在の姿になったようです。徳源院に所蔵されている京極氏歴代の木像のなかでも高次のものがもっとも巨大なこともこのことを物語っているのかもしれません。

中井 均「京極家墓所を読み解く」を一部参照

（歴史・文化財保護室）